
雪の降る日

憂月 朱音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の降る日

【Nコード】

N4941Z

【作者名】

憂月 朱音

【あらすじ】

雪の降る日の女の子お話。

（前書き）

えー、短編です。

色々残念な文かもしれませんが。

よろしければ読んでみてください。

学校帰りの静かな住宅街を歩いていると

「あ、雪だ・・・」

私の真つ白な手袋の上に白い雪が降ってきた。
ハアと白い息をはく。

「寒い・・・」

近くに自動販売機を見つけて少し速足で歩く。
少しでも暖かいものが欲しかった。

自動販売機には暖かいココアと冷たい飲み物しかなかった。
もちろん私は迷わずココアを選ぶ。

ガシャンという音と主ともに落ちてきたココアを取る。

「温かい・・・」

缶に触れる指先だけがジンワリと暖かった。
しばらく缶を両手で持ち帰路を急いだ。

「倉崎か？」

急いでる時に何なのよ。
と思って振り返ると見慣れた顔がそこにはあった。

「工藤くん!!」

高校で同じクラスメイトで私が片思いをしてる相手でもあった。

「倉崎の家ってこの辺なのか？」

「う、うん・・・」

緊張してしまい声あまり出ない。

「そっか、じゃ、途中まで帰ろうぜ」

「良いの？」

「もちろん」

工藤君は満面の笑みで承諾してくれた。
そして私達は横並びで帰ることになった。

「倉岡ってさ、部活何入ってんの？」

「一応・・・、吹奏楽部だよ」

「マジかー!。吹奏楽も帰りこんな遅くなるんだ」

「コンクールが近いから・・・かな」

あまり上手い答えが出来ない。
声が震えてしまう。

「そつか。頑張れよ」

「うん!」

「じゃあ、俺こっちだから」

十字路に出たとき工藤君は私と反対の道を指さしていた。

「わかった。じゃあね」

うまく言えたかどうか知らないけど極力明るい感じの声で言えた。

「あ、そつだ」

「ん?」

工藤君は何かを投げてきた。

「ワッ!」

突然投げられたから落とすところだった。

「倉崎、寒そつだったからそれやるよ」

「え?」

投げてきたものは白い毛糸のマフラーだった

「じゃな」

と工藤君は片手をあげて歩いて行った。

私はその場に呆然と立っていた。

ほんの数分だったけどとっても幸せな時間だった

そう考えると受け取ったマフラーを首に巻いて
弾んだ足取りで家に向かって私も歩いて行った。

（後書き）

あーーー。

短編です。

多分こんなことは無いんじゃないでしょうかwww

でも書いてしまいましたwww

今一応連載小説書いてるのですが

今日続きを投稿するとか言ってたのにできませんでした

申し訳ありません。

ではまたこの小説に関する感想、アドバイスがあればください。

お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4941z/>

雪の降る日

2011年12月16日20時54分発行